

英国の研究委員会はオープンアクセス出版計画の成功を主張する

Giles, Jim. UK Research councils claim success for open-access publishing plan.

Nature. Vol.435, No.7042. p.543. 2 June, 2005.

<<http://www.nature.com/nature/journal/v435/n7042/pdf/435543a.pdf>>

ロンドン発

英国の主要な公的研究助成機関は、不可能と思われること、すなわち、オープンアクセス出版を巡る議論の[対立する]両方の側を喜ばせる方針を、思いついたように見える。しかし、見かけにだまされる可能性がある。この声明への公式な賞賛の陰で、学会を危険にさらすことになる、小規模な雑誌が廃刊に追い込まれる危惧を、一部の出版社が表明している。

科学出版の現行システムの反対者は、公的な助成を受けた研究が無料でアクセスできる雑誌又はアーカイブで利用できることを要求し、近年激しくロビー活動を行った。米国でのテレビ広告を含む、彼らのキャンペーンは、学術出版社を心配させた。その危惧は、論文が無料になると、図書館が[雑誌の]予約購読を中止することである。

オープンアクセスの支援者は、政府の科学助成の大半を配分する、英国の研究委員会による規則の作成を受けて勝利を宣言している。その方針は、彼らを大喜びさせている。なぜなら、それは出版後「できる限り早く」オープンアクセス・アーカイブに委員会が助成した論文を提出することを要求するからである。米国国立衛生研究所(National Institute of Health: NIH)を含む、世界中のその他の主要な研究助成機関は、研究者が著作を保管する前に1年待つことを認めている。

オープンアクセスの提唱者であり、サウザンプトン大学の認知科学者である、Stevan Harnad は、英国の方針の[論文]提出の強い主張が、オープンアクセス・アーカイブの利用を学究的生活の習慣の一部とすることを確信する。「これについての歴史が書かれるとすれば、この声明は単一で最も重要な要素となろう。」と彼はいう。

しかし、出版社の苦情によって行われた方針の重大な変更は、もしかすればアーカイブの力を弱くすることもあり得る。昨年秋に出された最初の草案に対する諮問の後で、委員会は、アーカイブへの論文の提出は、論文を出版する雑誌の著作権及びライセンス契約に従うように方針を変更した。出版社の幹部は、[論文の]提出が数ヶ月の時差で行われ、それによって予約購読の収益が守られるように規則を現在書き換えることができると、非公式にいう。

商業雑誌は、その方針に満足しているが、その他の出版社は、危惧を抱いたままである。

例えば、学会は、奨学金制度のような活動への助成を出版[収入]を通じて行う。図書館は資金繰りに苦しんでいて、アーカイブが動き始めると、[雑誌の]予約購読、特に年に数回しか出版されないような雑誌の中止を検討するだろう、と彼らはいう。「これが実施されると、どれくらい被害を受けるのか絶対にわからない。」とウェスト・サセックスに本拠がある学会・専門協会出版社協会 (Association of Learned and Professional Society Publishers) の Sally Morris 事務局長はいう。「他の助成機関もこのやり方に追随すると、多くの資料が無料で利用できるようになるだろう。支払を誰がするのか？」

Harnad は、懸念する必要がないという。というのは、アーカイビングが普通であるコンピュータ科学及び物理学のような分野では、雑誌が衰退しているという証拠がないからである。

英国最大の民間助成機関であるウェルカム財団は、この考え方についてずっと強気である。財団は、5月19日に財団の資金を利用して作成された全ての論文は、NIHIのアーカイブであるPubMed Centralが開発中である英国の同等機関に提出しなければならないだろうと述べた。財団の理事長であるMark Walportは、「歴史のある雑誌はときには刊行を終了するが、新しい雑誌が誕生するだろう。」という。「学会に対してある種の同情を持つが、学会を支援するのは助成機関の主たる目的ではない。」

委員会の声明は、未だに「微調整中である」と関係筋はいう。本来、今月の公表予定は、夏まで延期されているが、その前に重要な変更さらされることは予想されていない。

英国の方針

科学者は、主題限定アーカイブ又は所属機関が運用している同等のアーカイブに論文を提出する。論文は、単に出版が受理された最終のテキスト文献で、印刷用の整形されたバージョンではない。

これによって、アーカイブの範囲が広がるが、論文へのアクセスは、それにもかかわらず単純でなければならない。昨年、Googleによって公開されたような、学術的な検索エンジンは自動的に機関リポジトリをつぶさに検索するので、利用者は論文が実際に保管されている場所を知らなくともよい。